

親の言語インプット内の副助詞「ハ・モ」と動詞の自他の区別  
Focus Particles *wa* and *mo* in Parental Input and the Distinction  
between Transitive/Intransitive Verbs

加山裕子, マニトバ大学

大嶋百合子, マギル大学

Yuhko Kayama, University of Manitoba  
Yuriko Oshima-Takane, McGill University

## 1. はじめに

日本語では、格助詞「ガ・ヲ」が文中の名詞句に付随することで文法的な情報、つまりその名詞句が文の主語であるか目的語であるかが明らかにされる。しかし話し言葉では格助詞の省略という現象が頻繁に起こり、さらに助詞だけでなく動詞の項も省略される (Rispoli, 1991 他)。こうした言語インプットを耳にしながらか、日本語を母語として学ぶ子どもはどのように自動詞・他動詞の区別を習得しているのだろうか。副助詞「ハ・モ」は、副詞や他の助詞など文中の様々な要素に結び付くが、「ガ・ヲ」の代わりに動詞の項に付く場合も多く (市川 2005)、さらに格助詞と違って省略されることがない。「ハ・モ」の発話は親子の会話に頻繁に観察され、動詞と一緒に発話されていなくても、前後の動詞文の主語や目的語になりうる名詞句が「ハ・モ」とともに単独で現れる場合も多く見受けられる。省略されて耳にされることが極端に少ない格助詞の代わりに、副助詞「ハ・モ」が自動詞・他動詞の項構造を獲得するのに何らかの役割を果たしてはいないだろうか。

この研究では加山・大嶋 (2023) の研究にさらにデータを追加し、親の言語インプット内の「ハ・モ」の使用が動詞の自他の区別を可能にするか否かを調査する。

## 2. 先行研究

Morikawa (1997) は日本語母語児の格助詞と自動詞他動詞ペアの項構造の習得を調べるために、一人の日本語母語児の自然発話データを 1;11 から 3;04 までの期間分析した。子どもが格助詞「ヲ」を獲得したと判断されたのは 3 歳以降であったが、獲得過程でも格助詞の使用の間違いが非常に少なかったことから、3 歳前には動詞の自他の区別を獲得していると解釈した。Morikawa は項の省略が多い日本語では親のインプット内で他動詞文に目的語が補充されない文が著しく多く、動詞の自他を区別するのに必要なインプットを与えられていないため子どもは親のインプットの助けなしで、自動詞他動詞の区別を概念レベル・論理レベルで獲得すると結論付けた。しかし、Morikawa が調査した子どもは 1 名のみで、しかも分析したデータは動詞などの述部が存在する文に限られていた。

Küntay & Slobin (1996) はトルコ語を話す母親の子どもに対する言語インプットを調査し、バリエーション・セット (variation set) と呼ばれる概念を提唱した。これは、項が頻繁に省略されるトルコ語において、同じ意図を伝えるために様々な追加・省略・語順の変化・言い換え・差し替えをおこなった一連の動詞文

のことである。Küntay & Slobin は、そうしたバリエーション・セットを聴くことで、子どもは項の省略が多い言語の統語構造などを習得していくと論じた。Kayama & Oshima-Takane (2022) は Küntay & Slobin のバリエーション・セットを再定義し、完全な項構造が一つの文に顕在化されることが少ない日本語に合わせて、項の省略や顕在化を含んだ様々なタイプの文フレームを含んだものを日本語のバリエーション・セットとした。Kayama & Oshima-Takane が調査した縦断発話データによると、親は既に言及されている対象物を動詞の項として顕在化する傾向が見られた。以下の例では、子どもの一語発話に母親が動詞を追加して文に変えている（子どもの年齢 1;09）。「ペンギン」や「まんま」は既に話題にあがっている対象物（ゆえに空の項でもいいはず）ではあるが、それをあえて顕在化し動詞の項として提示することでより多くの情報を提供し、子どもの項構造の獲得に役立っているのではないかと Kayama & Oshima-Takane は提案した。

- 1) \*CHI: ペ (ン) ギン.  
 \*MOT: ペンギン 何 食べてた?  
 \*CHI: まんま.  
 \*MOT: まんま 食べてたね.

加山・大嶋 (2023) は、格助詞と違って省略されることのない副助詞「ハ・モ」が親子の対話に頻繁に現れ、特に「モ」は早い時期に子どもにも発話される (Matsuoka, Miyoshi, Hoshi, Ueda, Yabu & Hirata, 2006) ことに注目し、「ハ・モ」が格助詞の代わりに使われることで項構造の獲得に寄与しているのではないかと推測した。母親の子どもへの発話の中で副助詞がどのように使用されているかを調査したが、副助詞の使用は母親・子どもの両方に見られたものの、それが項構造の獲得に関係しているかどうかは明らかにはされなかった。加山・大嶋でコードされた副助詞は動詞とともに発話されるもののみに限られ、そのため頻度が低く、はっきりした結果が得られなかったと考えられる。しかし加山・大嶋は、同じ動作の繰り返しや様々な種類のものを次々と扱う親子の遊びの中では、動詞を繰り返し使わなくても、副助詞「ハ・モ」を使って言い換えや差し替えが頻繁に行われることで、子どもにとって項構造を獲得しやすくしている可能性がある」と論じている。

次の例は、子どもとおままごとをしている母親の一連の発話である（子どもの年齢 1;09）。

- 2) \*MOT: トマトも 切れた.  
 \*MOT: はい、じゃあ みかんは?  
 \*MOT: x x ちゃん、切って.

最後の発話で目的語が省略されている。だが省略された名詞句が何であるかは、直前の発話から明らかである。2 番目の発話では動詞が省略されているが、「ハ」の使用によって前に現れた名詞句と「みかん」が対比されている。このよ

うに、動詞が省略されている場合でも、前後のつながりによって欠けている動詞を補うことができる。つまり項の省略と同様に、動詞の省略もバリエーション・セットの一部と考えられるのである。そこで、本研究では Kayama & Oshima-Takane の日本語の文フレームの表に (c) と (h~i) を追加することにした (∅ は項の省略、Ø は動詞の省略を表す)。

### 3) 日本語の文フレーム

#### 自動詞

- a. S V (主語顕在)
- b. ∅ V (主語省略)
- c. S-wa/mo Ø (主語+副助詞、動詞省略)

#### 他動詞

- d. S O V (主語・目的語とも顕在)
- e. ∅ O V (主語省略、目的語顕在)
- f. S ∅ V (主語顕在、目的語省略)
- g. ∅ ∅ V (主語・目的語とも省略)
- h. S-wa/mo ∅ Ø (主語+副助詞、目的語省略、動詞省略)
- i. ∅ O-wa/mo Ø (主語省略、目的語+副助詞、動詞省略)

本研究では母親の副助詞「ハ・モ」の使用をさらに詳しく調査・分析することにより、副助詞の使用が子どもの動詞の自他の区別にいかに関係しているかを調べる。

## 3. 本研究

### 3.1 データ

本研究では、Kayama & Oshima-Takane で使用された日本語母語児 3 名とその母親の長期にわたる発話データを分析した。観察時期は子どもの年齢が 0;10、1;09、2;06、2;08、3;01 の 5 回で、1 名の子どもに関しては最初と最後の観察時期が 1;03 と 2;11 であった。親子の自然な発話が各観察時期にそれぞれ一時間ずつビデオで録画され、その後 JCHAT (Japanese Codes for the Human Analysis of Transcript) (Oshima-Takane, MacWhinney, Sirai, Miyata, & Naka, 1998) を用いてすべての発話を書き起こされた。加山・大嶋 (2022) の研究では動詞の項 (自動詞の主語、他動詞の主語/目的語) が発話されている場合に格助詞「ガ・ヲ」が使用されているか、加山・大嶋 (2023) では動詞の項とともに「ハ・モ」が使用されているか否かがコードされていた。本研究では、動詞が省略されている発話内の「ハ・モ」を新たにコードし、その頻度を CLAN プログラム (MacWhinney, 2000) を用いて算出した。

### 3.2 コーディング

本研究では、動詞が省略された発話内で使われている副助詞に注目し、新たに次のようにコーディングを行った。

「ハ・モ」がついている名詞・代名詞が、上の例(2)の2番目の文のように動詞の項を置き換えていると明らかにわかる(省略されている一般動詞が明らかである)場合にコードした。また「ハ・モ」が現れる発話でも、述部が「だ・です」などのいわゆる *copula verb* や形容詞を置き換えていると考えられる場合、「ハ・モ」が副詞句に付くなど「ガ・ヲ」に置き換えられない場合、疑問詞を使った疑問文の場合はコードから除外した。それぞれの「ハ・モ」に関しては、動詞が省略されてはいるが、どの項を置き換えているか(主語・目的語等)は前後のやり取りを吟味しながらコーディングを行った。置き換えている項が主語か目的語かははっきりしない場合には「不明」とコードした。

### 3.3 結果

今回新たにコード・算出された副助詞「ハ・モ」を、観察時期ごとの使用頻度で以下の表1に示す。

表1: 動詞が省略された発話内の副助詞ハとモ(母親)

		ハ				モ			
		A	O	S	UND	A	O	S	UND
母親1	0;10		1		5				
	1;09		1		1		1	1	
	2;06					1			1
	2;08	1	1	2			1		
	3;01			1	1				
母親2	0;10		3	1	11		1		
	1;09		1	1	2		6		
	2;06			1					1
	2;08	1	2	1	1		4		
	3;01						1		
母親3	1;03		1	8	4	6	14	11	6
	1;09		1	2	3	1	3		
	2;06		1						
	2;08		3	1			2		
	2;11		1	2		1			

A: 他動詞の主語 O: 他動詞の目的語 S: 自動詞の主語 UND: 不明

上の数字は、動詞が省略されている発話内で使われている副助詞である。全体的に頻度は少ないが、詳しく見てみるとどの母親も「ハ」を他動詞の目的語

(O)と自動詞の主語(S)に、「モ」を他動詞の目的語(O)に比較的頻繁に使っていることがわかる。特に母親2と母親3は、観察期間のより早い時期に「ハ・モ」を多く使用する傾向が見られた。

以下の図1~3は、加山・大嶋(2023)の母親の格助詞・副助詞の頻度の図に今回のデータを追加したものである。母親は3人とも助詞を使用しない発話

(‘no particle’)が最も多いが、副助詞「ハ・モ」に関しては、母親1の3:01(他動詞の目的語)以外、どの母親も自動詞文の主語(図1)に最も多く使用していた。自動詞・他動詞を区別する役割を担うのは他動詞文の目的語であるが、他動

詞の目的語（図3）に注目してみると、母親1の3;01の「ハ・モ」の使用が多かった以外、どの母親も副助詞の頻度は特に高くはなく、前回の結果と変わらないように思われる。しかし前回の結果と比較すると、母親2と母親3の副詞の使用が全体的に多くなっているうえ、他動詞の目的語に関しては、格助詞よりも副助詞をより頻繁に使う傾向が母親3の2;06以外、すべての母親に見られた。

図1：母親の自動詞の主語（S）における助詞の使用頻度

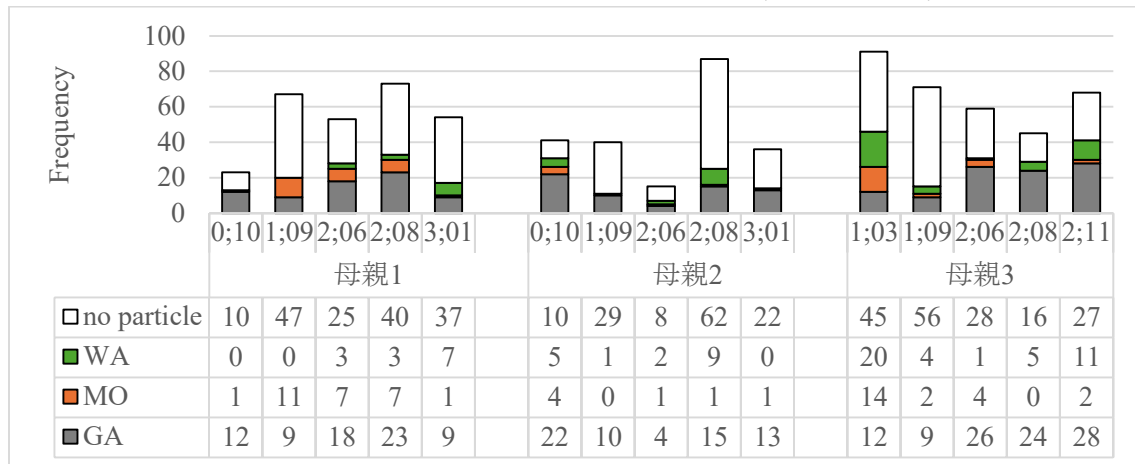


図2：母親の他動詞の主語（A）における助詞の使用頻度

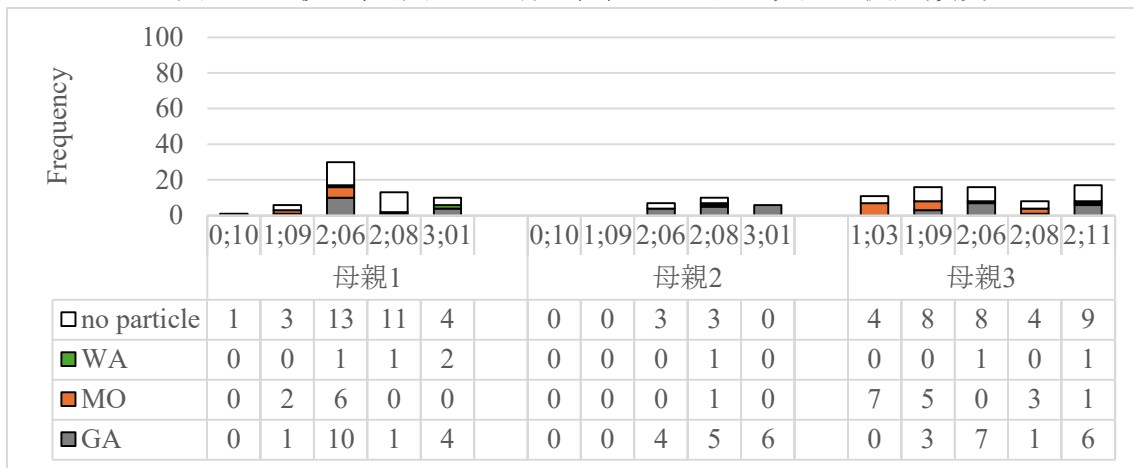
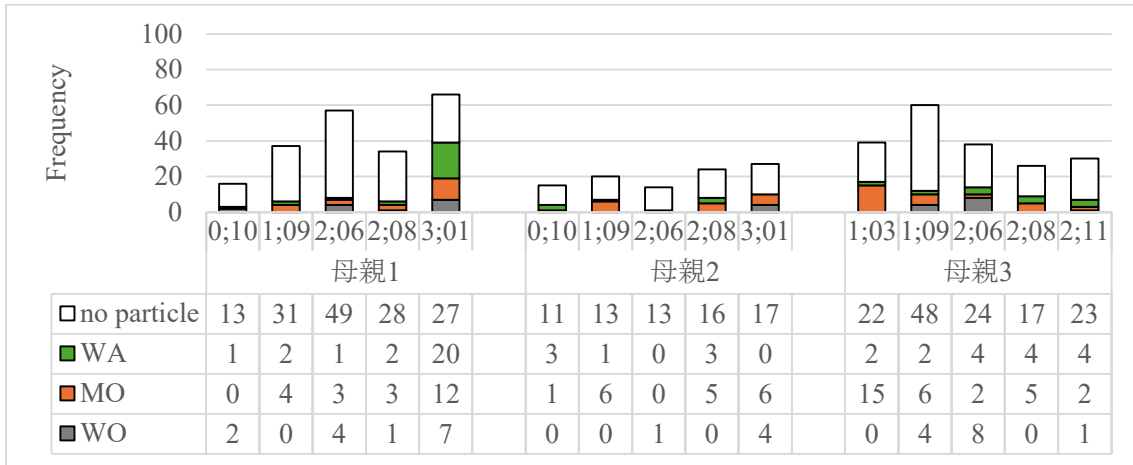


図3：母親の他動詞の目的語（O）における助詞の使用頻度



次に、今回コードした子どもの結果を表2に示す。

表2：動詞が省略された発話内の副助詞ハとモ（子ども）

		ハ				モ			
		A	O	S	UND	A	O	S	UND
子ども1	0;10								
	1;09								
	2;06		2	2			5		1
	2;08	1	1	2		3	2	2	1
	3;01						1	1	
子ども2	0;10								
	1;09								
	2;06								4
	2;08	1	1	1	2	1	1		1
	3;01								
子ども3	1;03								
	1;09							1	
	2;06		1		1				
	2;08		3	1		1			1
	2;11			1					

A: 他動詞の主語 O: 他動詞の目的語 S: 自動詞の主語 UND: 不明

母親のデータと同様、動詞が省略された発話の中で副助詞の頻度は高くはない。子どもが副助詞を発話しているのは子ども3の1;09の「モ」以外、2;06以降になっている。

以前の子どものデータに今回のコードを加えたものを以下の図4~6に表す。母親の結果と同様、子どもの結果においても助詞が省略される（‘no particle’）発話が多いが、助詞の省略よりも使用のほうが多い場合（特に子ども1と子ども3の他動詞の主語（A））も見られた。子ども3は自動詞の主語と他動詞の主語に格助詞「ガ」をより多く使う傾向が見られたが、他動詞の目的語ではすべての子どもに関して格助詞「ヲ」はほとんど発話されておらず、代わりに副助詞「ハ・

モ」が発話されていた。特に子ども1は他動詞の目的語に格助詞を使わず、副助詞だけをを使用しており、この傾向は、目的語に副助詞を頻繁に使用する子ども1の母親の傾向と対応している。

図4：子どもの自動詞の主語（S）における助詞の使用頻度

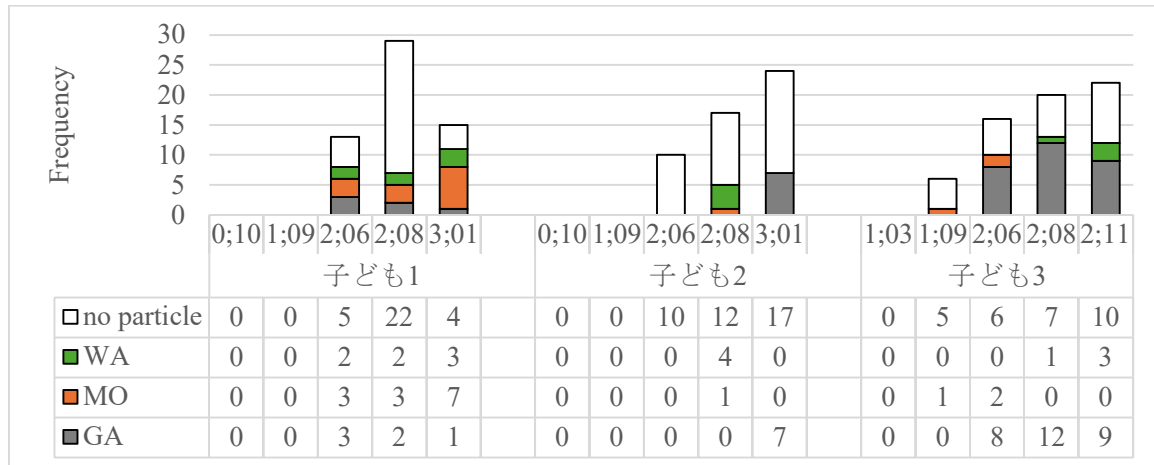
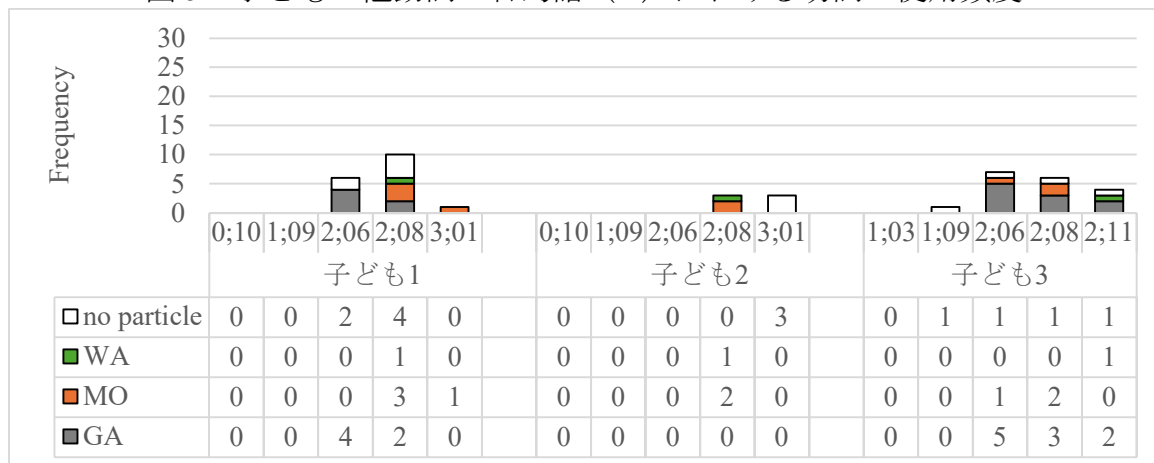


図5：子どもの他動詞の目的語（A）における助詞の使用頻度





象物にも当てはまることを示唆しているからである。次の例（5）では、母親が食事の後に子どもにテーブルを拭くよう促している。

- 5) \*MOT: はい、自分でふきふきしてください。  
\*MOT: ここは？  
\*MOT: x x（子どもの名前）、ここも。  
\*MOT: ここも ふきふきしてください。（子ども 2、1:09）

上の例では下線がひかれた「ハ」と「モ」の発話内で動詞が省略されている。最初の発話では動詞が顕在するが、主語と目的語はともに省略されている。この発話だけでは、子どもが「ふきふきする」を自動詞であると解釈してもおかしくはない。しかし、後に続く「ここは？」「ここも」で「拭く」動作が様々な箇所（目的語）に対して行われるものであるということが明らかになる。動詞が省略されても「ハ」の「対比」の役割によって、言及された対象物以外のものが同じ状況下にあることが暗示される。「モ」の役割は例（4）で述べたものと同様、その名詞句が既に言及されたものと「並立」関係にあることを示す。「ふきふきする」が自動詞ではなく他動詞であることが、副助詞が使用される発話によって推測しやすくなってくると考えられる。

こうした例（4～5）のような副助詞が結びついた名詞句が、動詞が省略された発話に追加的な情報を提供するやり取りは、親子の日々の会話に頻繁に存在して子どもの動詞の項構造の習得に重要な手がかりとなっていると考えられる。

Morikawa（1997）は親のインプットに項が補充されていないことが多いため、子どもはその手助けなしで項構造の獲得が行われると論じた。確かに日本語では、動詞の項や格助詞の省略だけでなく、動詞の省略も文法的に可能であり、すべての発話で完全な項構造が提示されることはない。しかし親子の会話では同じ動作が繰り返し行われたり、様々な対象物が同じ状況化に置かれたりする活動や遊びが多く、言及された項以外の人やものの存在を暗示する「ハ・モ」を使用することによって、子どもが動詞の意味や項構造を理解しやすくしているように思われる。動詞文のバリエーション・セットに格助詞・副助詞の使用を組み合わせると、親のインプットが動詞や項の情報を多様な形で提供し、それによって動詞の自他の区別の習得を助ける重要な役割を果たしていると言えるのではないだろうか。

## 参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク  
市川保子（2005）『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク  
加山裕子・大嶋百合子（2022）日本語における親の格助詞の使用と動詞の自他の区別について Presented at the *Japanese Society for Language Sciences (JSLS)* 23rd International Conference.

- 加山裕子・大嶋百合子 (2023) 日本語における母親の副助詞「ハ・モ」の使用と項構造との関連 *CAJLE 2023 Proceedings* (online).
- Kayama, Y., & Oshima-Takane, Y. (2022). The acquisition of argument structures of intransitive and transitive verbs in Japanese: The role of parental input. *First Language*, 42 (1), 144–167.
- Küntay, A., & Slobin, D. (1996). Listening to a Turkish mother: Some puzzles for acquisition, in D. I. Slobin, J. Gerhardt, A. Kyratzis, & J. Guo (Eds.), *Social Interaction, Social Context, and Language* (pp. 265-286). Erlbaum.
- MacWhinney, B. (2000). *The CHILDES project: tools for analysing talk: Vol. 1. The format and programs* (3rd Ed.). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Matsuoka, K., N. Miyoshi, K. Hoshi, M. Ueda, I. Yabu, & M. Hirata. (2006). The Acquisition of Japanese Focus Particles: *dake* (only) and *mo* (also). In *Online Supplement to the Proceedings of the 30th Boston University Conference on Language Development*.
- Morikawa, H. (1997). *Acquisition of Case Marking and Argument Structures in Japanese*. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Oshima-Takane, Y. MacWhinney, B., Sirai, H., Miyata, S., & Naka, N. (eds.) (1998). *CHILDES for Japanese. Second Edition*. The JCHAT Project Nagoya: Chukyo University.
- Rispoli, M. (1991). The acquisition of verb subcategorization in a functionalist framework. *First Language*, 11, 41-63.

#### 謝辞

以下の方々・機関にお礼を申し上げます。

参加者のお母さんとお子さんたち, Sumiho Kawata, Reiko Itsubo, Natsumi Kinoshita, Kayo Nakamura, Keiko Ito, Hisako Noguchi, and Kanako Hiramata.  
The Japanese Society of Promotion of Science, and the Social Sciences and Humanities Research of Canada.